

## 「倫理」と「道徳」

Meanings of “Ethics” and “Morals”

永嶋 哲也

しばしば「倫理」と「道徳」の違いが話題になる。本学会でも第8回（2017年、於・鹿児島大学）と第5回の学術大会（2014年、於・産業医科大学）で議論の俎上に載せられたと記憶している。この両者は果たして意味を異にするのだろうか？基本的に同じ意味だとして用いようとする者もいるが、使い分ける者もいるというのが事実である。そこで本稿ではこの二つの語について考察してみたい。

### 日本語としての「倫理」「道徳」

日本語（和語・漢語）としてまず考えてみよう。漢字の字義から推察し、「倫理」が「人として守るべきみち」の「ことわり」を本来意味し、「道徳」が「人のふみ行うべき道」とそれを実行するための「人間の習慣・徳」を意味していると言ってみても多く人は頷いてくれるだろう。「倫」と「道」が「みち」を共通して意味するので、後に続くのが「理」<sup>ことわり</sup>なのか「徳」<sup>とく</sup>なのかで、倫理は規範や原理に意味の重きがあり、道徳は個人的な習慣や態度にそれがあるように思われる。

しかし実際にわれわれはこの二つの語をそのように使い分けているだろうか？おそらくは「否」と答える人も多かろう。多くの者にとってこの二語は基本的には同じ意味で、そして違いはむしろもっと曖昧なところにある

のではないだろうか。言葉に対してわれわれは語義だけでなく、語感というものを抱く。つまりその語によって表し示される意味内容だけでなく、その語から受ける印象のようなものを抱く。そしてその印象に関して、「道徳」は比較的馴染み深く身近でそれほど堅苦しくなく、「倫理」はそれに対して余所行きで畏まり堅苦しい印象があるというのが私見である。

大型の辞書を参照してみると、そのような語感を傍証しているように読める。『日国』によれば、「道徳」は第1義として「人間がそれに従って行為すべき正当な原理（道）と、その原理に従って行為できるように育成された人間の習慣（徳）」とあり、用例として古くは『続日本紀』706年や『正法眼蔵随聞記』1235-38年などが挙げられている（『日本国語大辞典』第二版、小学館、9巻、2000-01年、1018-19頁）。つまり「道徳」という語は今日“morals”の訳語としての印象が強いが翻訳のために造語されたのではなく、仏教や儒教、道教などの文脈でまさに「道徳」の意味で使われていたということがわかる。実際、その辞書では「道徳」という見出につづいて「道徳意識」から「道徳論」まで実に25の「道徳～」という複合語が並んでおり、日本語において馴染み深く使いやすい表現だったことがうかがい知れる。

ところが同じ辞書で「倫理」を引いてみると「倫理」に続いている「倫理～」の複合語は5項目だけで、道徳に比してかなり少ない。さらに「倫理」の第1義として「人倫の道。社会生活で人の守るべき道理」とあり、用例

も『信長記』1622年が挙げてある(日国二、13巻、1010頁)ことから、こちらも翻訳語として造語されたものではないとわかるが、複合語の少なさから察するところ道德ほど一般的な語ではなかったであろう。「倫理」の第2義として「倫理学の略」とある。倫理学は *ethics* に井上哲次郎(1856-1944)があてた訳語である(前掲書同所)。もともとマイナーだった倫理が *ethics* の訳語として表舞台に出たものの、主な出番は学問たる倫理を連想する堅苦しい文脈にほぼ限られていたのではないだろうか。

### 翻訳語としての「倫理」「道德」

次に「倫理」「道德」と訳される“*ethics*”と“*morals*”について考えたい。事実、「倫理」「道德」という語の意味は“*ethics*”“*morals*”から非常に強く影響を受けているが、上述した「二語は基本的には同じ意味」で違いは語感にあるというのは“*ethics*”“*morals*”からの影響なのかもしれない。

一足飛びに語源まで遡ろう。ラテン語“*moralis*”はギリシア語“*ethica*”を翻訳するためにキケロー(Marcus Tullius Cicero 106BC-43BC)が造語したものである。『運命について』において彼は、(テキスト脱落、おそらく「*ἠθικά*」あるいは「*ἠθική*」な学)は *ἠθος* についての学なので「*mores* についての学」(*philosophia de moribus*)と呼ばれているが、新たなラテン語を導入して「モラルな学」(*philosophia moralis*)と呼ぶことにしよう、と言う(Cicero, *De Fato*, I, 1. 『運命について』『キケロー選集 11』、岩波書店、2000年、278頁)。例えるならカタカナの「フィロソフィー」と漢字の「哲学」(“*philosophy*”の訳語として造語された)とが本来同じ語義のはずであるのと同様、“*ethics*”と“*morals*”の語義は同一でなければならない。

しかしキケローが“*moralis*”を案出して2000年以上の時間が流れている。また、もとよりギリシア文字をラテン文字に変えただけの *ethica* > *ethics* と、ラテン語として造られた *moralis* > *morals* では、語感がまったく異なっていたであろう。ラテン語はイタリア語やフランス語などロマンス諸語の話者にとっては直系の古語であるし、英語にしてもゲルマン語系とはいえ古フランス語を通じてラテン語から多数の借用語があり、実母ではなくても義理の母くらいの関係ではあるからである。つまり“*morals*”は馴染み深く身近であったのに対して“*ethics*”は畏まった堅苦しい表現だと感じたはずである。その違いゆえに、言語感覚に優れた人が“*ethics*”と“*morals*”に対して違う意味を込めて用いるということも多々起こったであろう。

結局、「倫理 *ethics*」と「道德 *morals*」の違いについて論じるには、一般的などころではなく、その論者がどのような違いを込めて使い分けているか、あるいは使い分けていないかという個人的な用語法のところを扱うしかない。そのような用語法の中には興味深い「解釈」も多数存在しているだろうことは想像に難くないが、それらの吟味はより適切な方々にお任せしたい。

(ながしま てつや 福岡歯科大学)